

吉野川歴史探訪 水防の知恵と信仰 その2



～地蔵信仰 危険箇所を知らせる石仏たち～

お疲れ様です。別宮川三郎です。新年度を迎え、皆さんも入学、就職、転勤など様々な節目を迎えているのではないのでしょうか。新しい環境では、喜びや不安が入り交じっていると思いますが、心機一転、新しい目標に向かって進みましょう。

さて、吉野川流域を歩くと、堤防の近くや道の四つ角などに、台座の高いお地蔵さんや水難供養の石碑、洪水にまつわる神社が数多くあり、今なお人々のよりどころとなっています。今月号は、それらについて探訪しましょう。

1. お地蔵さんと水防の知恵

～洪水が生んだ祈りの造形、「高地蔵」～

吉野川中下流域の低平地は、台座の高いお地蔵さんの故郷と言っても過言ではないでしょう。俗に「高地蔵」と呼ばれ、堤防の近くや川岸のあちこちで多く見られます。これは、「お地蔵さんが洪水に浸かったり流されたりしてしまっは申し訳ない」という信仰心からつくられたもので、城構えの家が、人の暮らしを守るために生まれた“暮らしの知恵”ならば、高地蔵の台座は、お地蔵さまを守るために生まれた民衆たちの“心の知恵”であるといえるでしょう。風雨に耐える高地蔵の懐深い表情には、暴れ川に苦しめられた民衆の歴史が刻み込まれています。高地蔵は、暴れ川の、民衆の心の、語り部なのです。

大地にしっかりと立ち、吉野川を背景に微笑みを浮かべて私達を見下ろす高地蔵。今はただひっそりと野路にたたずむ高地蔵…。点在する高地蔵は、その数二百体から三百体。万物一切を包みこむ地藏菩薩は、十分な堤防が無く幾度も洪水に見舞われた藩政期から明治にかけて、中下流域で数多く建立されました。

旧吉野川沿いの藍住町乙瀬中田にある高地蔵（写真2）は、慶応4年（1868）に建てられたもので、大水害をもたらした「寅の水」の2年後です。台座には「為溺死亡霊菩提」とあり水難供養のお地蔵さんであることがわかります。

また、吉野川の支川、飯尾川の南島橋（石井町高川原）のたもとに安座する高地蔵（写真3）も、かつてこの辺りの水害で子供が何人も溺れたため建てられたもので水難供養のお地蔵さんです。

台座の高い地蔵が建つ場所ほど洪水被害は大きく、民衆の願いもまた大きかったと言えます。そこには今も絶えることなく、赤いよだれかけや美しい花、たくさんの供物を見ることができます。人々は皆、知っているのかもしれませんが、**暴れ川の歴史は、これからも途絶えることなく連綿と続いてゆくことを。私たちの住んでいる土地は今でも吉野川の氾濫原であることにかわりありません。**



写真1
徳島市国府町東黒田にある高地蔵
地元の人に「うつむき地蔵さん」と親しまれ、徳島県内で最も高いものといわれる。文化8年（1811）建立。



写真2
藍住町乙瀬中田にある高地蔵



写真3 飯尾川の南島橋（石井町高川原）にある高地蔵

～洪水の危険度を知らせる警鐘地蔵～

吉野川流域に点在する高地蔵。数ある高地蔵の中で一番高いのは、国府町東黒田の「東黒田のうつむき地蔵」(写真1、4)です。全高4.19m、台座までは約3mもあります。このお地蔵さんが見おろしている辺りは、吉野川と飯尾川にはさまれた、かつての洪水常襲地帯であり、その高さから当時の洪水位がいかに高かったのかがわかります。

次いで、藍住町東中富の「東中富の龍池の地蔵」(写真5)で、全高3.82m、台座高2.89m。三番目に高いのが、全高3.72m、台座高2.67mの川島町川島城山「川島の浜の地蔵」(写真6)です。

点在する高地蔵それぞれの位置を、吉野川浸水想定区域図へ落とし込んでみると、殆どが浸水想定区域内に位置します。(図1参照)また、高地蔵は中流部の低平地に多くあり、しかも、右岸(南岸)に多いことがわかります。これは、右岸(南岸)のほうが、左岸(北岸)よりも地形的に低いために洪水常襲地帯になっていたためだと思われます。

高地蔵が暴れ川の洪水遺産だとすれば、これは当然の結果なのかもしれません。土地が低く、被害が大きかったと思われる場所の高地蔵は、必然的に台座が高くなります。そして、被害が大きかったからこそ、沢山の高地蔵が建立されたと考えることができます。**浸水想定区域図に落とし込んだ高地蔵の印は、「洪水ハザードマップ」に他なりません。**

高地蔵は、洪水から地蔵尊の像を守ろうとする先人たちの信仰心によって生まれました。しかし、それだけではありません。身近な高地蔵に供花・供物を捧げ、祀ることによって、毎日の暮らしの中でいつも洪水の恐ろしさを忘れることなく、水防への心構えをしていたのです。このように、高地蔵は、四国三郎・吉野川と闘い、共に生きた先人たちが水の危険性を伝承してきた無形の文化なのです。

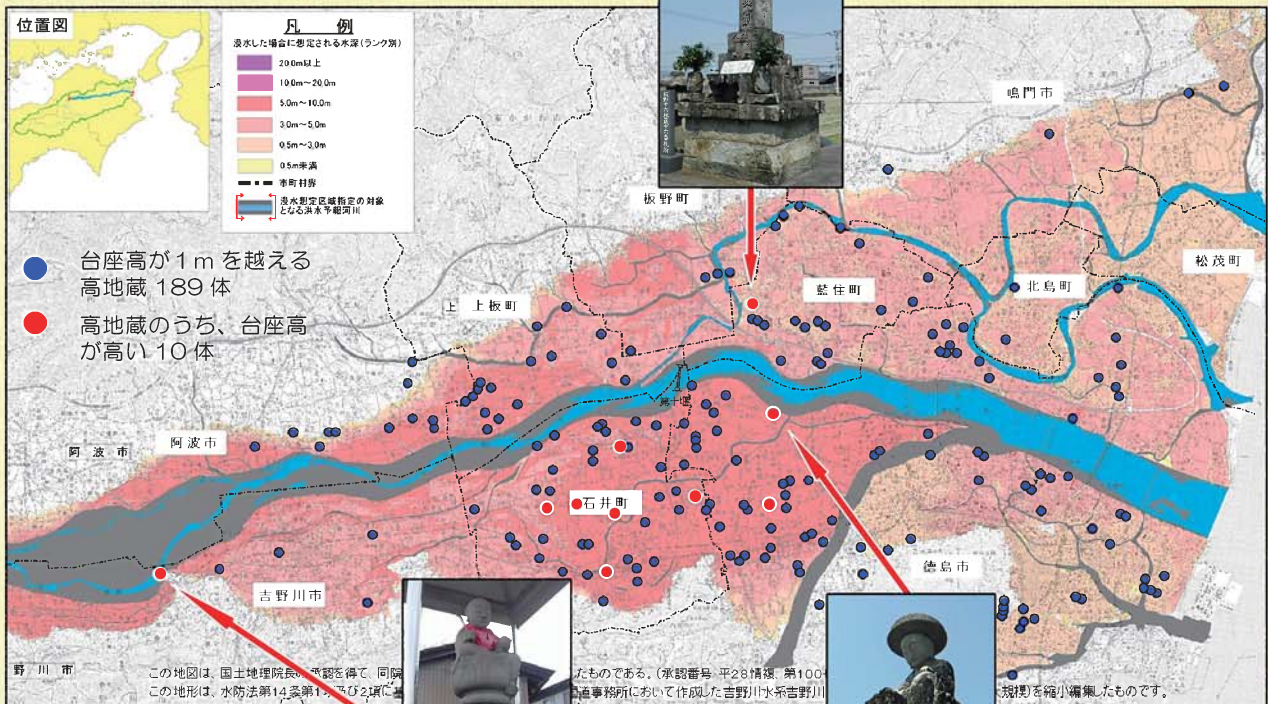


図1 高地蔵マップ

写真5
東中富の龍池の地蔵
(藍住町東中富)

写真6
川島の浜の地蔵
(川島町川島城山)

写真4
東黒田のうつむき地蔵
(徳島市国府町東黒田)

2. 渡船地蔵と水難供養碑が伝えるもの

昔の渡船場にあるお地蔵さんは、かつてその付近で渡船事故があったことを示しています。これは川を渡る人々の安全祈願と、水難者を供養するために建てられたものなのです。

下流の古川渡しのお地蔵さん(写真7)、市久保渡しのお地蔵さん(写真8)、上流の池田町・渦の渡船場のお地蔵さん(写真9)は、これにあたります

また、渡船場に限らず、水難事故があった場所に建てられたお地蔵さんや石碑もあります。

このようなお地蔵さんや水難供養碑は、信仰の対象であると同時に、危険地帯であったことを知らせる役目も担っています。そこには柔和な顔つきをしたお地蔵さんが過去に破堤したところや水難事故があった場所を絶えず見守っています。**大きな堤防ができた今、大水害がなくなり水防への意識が失われつつあります。しかし、大きな水害は必ず発生するという前提に、水害を我がこととして捉えるため、先人達が伝承の中で残そうとした知恵を改めて見直し後世に伝えていきたいものです。**



写真7 古川渡しの地蔵(徳島市上助任町)

もとは現在の場所から北へ約300メートルほどいったところにあったといわれる。



写真8 市久保渡しの首なし地蔵(山川町川田市) 楠木神社のそばの堤防の下にある。大きな木の陰に隠れて、首もなく、今ではすっかり忘れられた存在になってしまっている。



写真10 上助任町の地蔵(徳島市上助任町)

水門付近に沈んでいたのを引き上げておまつりしたのだという。台座の右側面に「明和元年廿四日申」、東側面に「かみすけとうむらこうちゆう 上助任邑講中」と刻まれている。



写真9 渦の渡船場の地蔵と供養碑(池田町) 渦の渡船場の西に渡船事故や水難にあった子供を祀った地蔵がある。明治十年建立。



写真11 愛宕地蔵(石井町西覚円)

「明治25年再建」とあり、明治21年の堤防決壊により、西覚円村の人々の手によってこの地に建て直されたものである。



写真12 小塚の供養碑（藍住町徳命字小塚北）
昔、御輿みこしを担いで吉野川を渡ろうとした人が溺れたために建てられたといわれ、吉野川の河原で発見されたものを再建したという。弘化4年（1847）建立。



写真15 六條大橋東の地藏（上板町下六條）
水難供養と、かつて堤防の決壊があったためにその安全祈願のためにつくられたという。



写真13 高木の東地藏（板野町高木）
旧吉野川の左岸にあり、水難供養と安全祈願のお地藏さんである。



写真16 榎島橋の不動尊（徳島市国府町東黒田）
飯尾川で子供が溺死する事故があり、これを建ててから事故がなくなったといわれる。明治9年（1876）建立。



写真14 原橋北の供養碑（藍住町矢上）
夕又ゆふまたきに化かされて正法寺川で溺れた人が多かったという話が伝わっている。もとはここより北にあったものを移転したらしい。明治40年（1907）建立。



写真17 長塚の西地藏（川島町三ツ島長塚）
川島町三ツ島長塚の堤防の裾に、吉野川の方に顔を向けてぼつんと立っているお地藏さんは、かつてはもっと北にあったのが、現在の堤防ができるときにここに移されたという。「祈川上之安全。明治12年建立」の文字が刻まれているが、頭だけ新しい。「堤防がつくられたとき、首がなくなってしまったので、新しくつけかえたのだ」と近所の人という。お供えのサカキが真新しい。聞けば「今でもここからだいぶ離れたところからお祈りにやってくる人がいるのだ」という。明治12年（1879）建立。

3. 伝承 ～夢告げ地藏～

北島町新喜来の光蓮寺境内に安置されているお地藏さんは、昔、旧吉野川（昔の吉野川）の堤防の上にあります。このお地藏さんには、次のような話が伝わっています。

「水じゃ。ごっつう流れてくるぞ！」

川の水が真っ黒になってふくれあがり、今にも自分を飲み込もうとしたときでした。

「お地藏さんが流されるぞお！」

誰かの叫ぶ声が聞こえました。その声ではっとして、夢から覚めました。

飛び起きてみると、何日も何日も降り続いた雨で、外は泥の海になっていました。

急いで堤に登って川を見ると水は黒く濁り、逆巻く流れとなって、足下の土を削っていました。また、お地藏さんが、その激流にもまれ、腰の辺りまで水に浸かっていた。

あわてて、お地藏さんを抱き上げると思ったよりも軽く、そのままかつぎ上げるや、少し離れた光蓮寺に運ぶことができ、ようやく胸を撫で下ろしました。

翌朝、あれほど降り続いていた雨もあがって、堤が切れなかったことを喜び、昨夜のお地藏さんにお参りにあがったときに、試しにとお地藏さんをもう一度持ち上げようとしたところ、いくら力をいれてもびくともしない。それもそのはず、三人がかりでも動かさないほどの重さなのでした。不思議なことがあるものだと、思案していたところ、ふっと我に返り、

「そうじゃ。昨夜の叫び声。ほれに、あのと時のごっつい力。あれは、お地藏さんの靈力に違いない。」

そう悟った。

早速この話を村の人に話すと誰もが一様に感心して、お地藏さんにお供えをし、盛大なお祭りを催しました。それからというもの、このお地藏さまは、「夢告げ地藏」と呼ばれるようになりました。

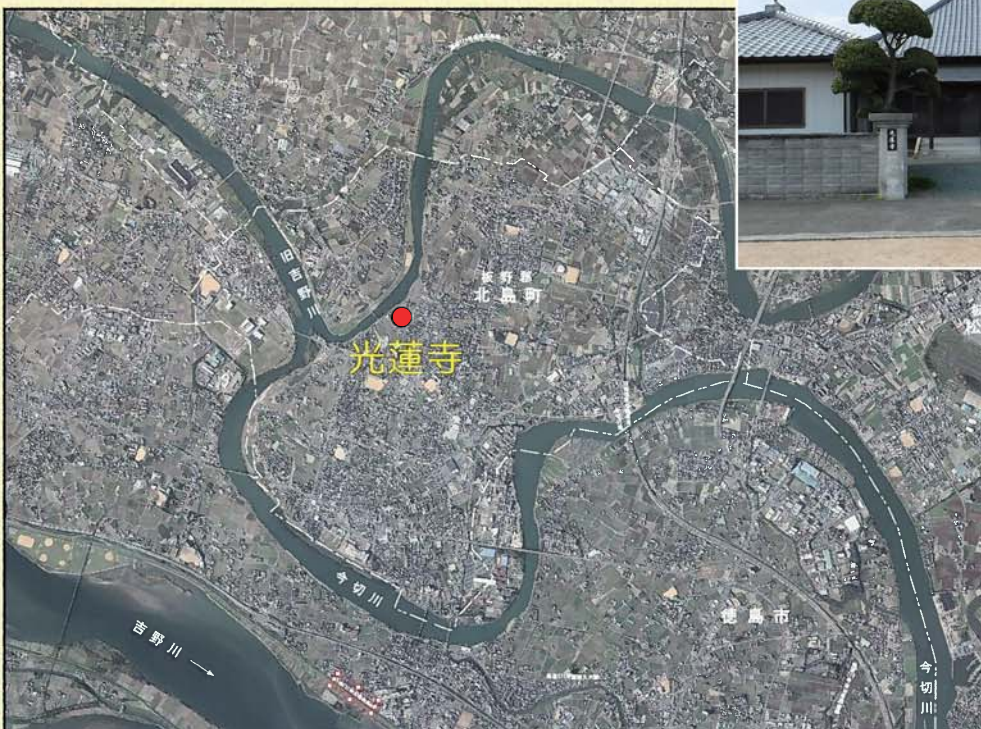


図2 光蓮寺位置図（平成29年撮影 航空写真）



写真18 光蓮寺
（北島町新喜来）



写真19 夢告げ地藏

4. 洪水を鎮める神楽太鼓の音

洪水が襲ってくるときに、どこからともなく神楽太鼓の音が聞こえ、荒れ狂う水をしずめたという伝承が各地に伝わっています。浮島八幡宮に伝わる話を探訪しましょう。

今から約 260 年前の宝暦年間に粟島（現在の善入寺島）に伊右衛門という人がいました。彼は大洪水のときに、住民、数家族を藍蔵の二階に避難させました。このとき、上流のほうから濁流が渦巻く中を草葺き屋根にまたがって家もろとも流されていくのを目のあたりにしたそうです。また、他のところでは逃げ遅れた少年が、木によじ登って泣きながら助けを求めていました。

そのとき、どこからともなく神楽太鼓の音が聞こえてきました。村人は「宮の島（浮島）八幡宮のお神楽が聞こえてくる。これで水枕を打った（水位が頭打ちとなり増水しないということ）と氏神さまがお知らせ下さっているのだ」と信じて安心したそうです。



写真 20 宮ノ島（浮島）八幡神社 川島町
川島橋を渡ってすぐ左にあったが、吉野川の改修工事に伴う善入寺島の買収により大正 5 年（1916）に移転し、川島神社（川島町）に合祀された。



写真 21 天佐自能和気神社 徳島市不動東町
吉野川と飯尾川にはさまれた地に建つこの神社には、靈験あらたかな神がいて、洪水になると社殿がお神楽の音を発し、たちまち水をおさめるという言い伝えがある。明治 32 年（1899）の大洪水のときも氏子らの念が通じたと碑文にある。



写真 22 杉尾神社の石碑 徳島市国府町東黒田
境内の石碑に「古来洪水に際し、神楽太鼓自ら鳴り渡りて、水の滯えを知らしめ給う」とあり、靈験あらたかな神社として知られる。

今月号は、高地蔵や水難供養碑などについて探訪しました。来月号では、水防の知恵と信仰その3と題して、洪水に備えた家づくりである「城構えの家」、水除け争いの地域間紛争をおさめるために用いられた「印石」などを探訪しましょう。